

3級 【シーチング組み立て】傾向と対策

<地直し・布目>

- ・持参したシーチングが厚すぎたり薄すぎたり、糊のききすぎたもの・腰のなさすぎるものなど、シャツブラウスのシーチング組み立てに適さないものを使用したため、シーチングの仕上がりがうまくいかず減点されることが多いので、標準的なシーチングを購入し使用することが望ましい。
- ・シーチングの地直しは最低縦方向、横方向の2本の基準となる線がないと正確に行なうことが難しいと思われる。地の目通りに線を入れ、縦横が直角になるようにアイロンをかける。シーチングの地直しが不完全なためにシルエットがうまく出ないこともあるので、試験以前の課題として適切なシーチングを正確に地直しして、しわの出ないように持参するよう心掛けていただきたい。
- ・シーチングにパターンを描き写す方法として、パターンの上にシーチングをのせてトレースする方法が一般的であるが、パターンとシーチングの地の目を完全に合わせて、必要な個所にプッシュピンや文鎮で固定して正確にトレースする必要がある。トレース時、シーチングに入れた基準となる線以外にも必要な基準線を忘れずに写しとることを心掛けていただきたい。

<身頃>

- ・今回のデザインはウエストダーツがあるシャツブラウスとなるので、少量のシェイプが表現されているのが正解となるが、前身頃のダーツを展開線のみ入れてバストダーツの展開をしたものがあり、ウエストが膨れて見えるものがあった。また裾までのダーツになるため、裾回りの上がり寸法が不足しているものもあった。
- ・シーチングに写したパターン線に対して、正確に縫い代を記入した後に裁断することが望ましい。部分的に縫い代幅が極端に狭くなったり広くなったりしてシルエットや見栄えに影響しているものが見られた。シャツブラウスであれば、切り替え線は1cm前後の一定の縫い代幅を付けた状態で、切り込みを入れなくても収まる程度のカーブ線が縫いやすく、美しい仕上がりが期待できるので、縫い代幅は正確に（裾・袖口は3～4cm、他は1cm程度）裁断して、アイロン処理することで実物の仕上がりに近いシルエットを出すことが可能と思われる。
- ・シーチングのピン打ちは決められた方法があるわけではないが、不正確なピン打ちでシルエットを崩すことは避けたい。一般的にシーチングのダーツ線や縫い目線は、どちらか一方を折って重ね、片倒しの状態にとめることが多いが、上に乗る側のシーチングの折り目にピンを刺し、下のシーチングを少量（1mm程度）すくってピン先を斜め上に出す方法が、ピンのあたりが少なくきれいな仕上がりになる。縫い目線に対しての方向は斜め・直角・平行など、止める角度に正解があるわけではないが、ピンを止めたことによってシーチングのシルエットを崩している場合は減点の対象になる。
- ・シーチングの縫い代を片倒しの状態にピン打ちする場合、どちら側を上に乗せるかについても正解があるわけではなく、結果としてシーチングが美しく表現されていればよい。今回はウエストダーツであるため縫製時と同様、縫い代が中心側に片返しになるよう中心側の線を折って脇側の線に乗せて止める。
- ・シャツブラウスに限らずだが前端や裾、袖口は出来上がりに折り、縫い代が出てこないようある程ピンで止める。折られていなければ未完成として不合格になるので注意する。
- ・組み立てたシャツブラウスをボディに着せ付けする場合、前中心・後ろ中心を合わせ、シーチングが着崩れないように、必要箇所にピン打ちすることが望ましい。前後中心がずれないようにネックライン付近やヒップの高い位置をダブルピンでボディにしっかり止め、衿の外回りも動かないようにする。

ボディの肩にかけているだけのシーチングは完成してないとみなされる場合があるので注意する。

<ボタン（身頃）>

- ・ボタン位置とバランスはよくできていたと思われるが、まれにボタンの数の間違いや大きすぎるもの、小さすぎるものもあった。
- ・配点の対象ではないが、ボタンホールも記入し実物縫製した時の雰囲気表現できるようにしていただきたい。

<衿・衿付け>

- ・衿の地の目はたて地、よこ地どちらでもよいとされているが、本来のシーチング組み立ての目的であるパターン修正に適した方法としては、後ろ中心をたて地にしたほうが適切と思われる。
- ・衿の外回りの縫い代は裁ち切りでもよいとされているが、特別な場合（微妙なカーブ線や形状の場合）以外は裁ち切りにしないで、縫い代が浮き上がらないようにアイロンでしっかり折り込んで、ピン打ちはしないほうが望ましい。衿付け線のピン打ちは、縫い目線のきわを衿付け線に沿って平行に止めるべきである。
- ・今回は前中心までのシャツカラーであるため、衿のつかない持ち出し部分は身頃組み立ての段階で中心線に切り込みを入れ出来上がりに折り、衿付けをするべきである。

<袖・袖付け>

- ・袖山が身頃アームホール寸法より極端に大きくいせ込めていない袖や逆に小さいために身頃がいせ込まれ身頃にしわが出ている物もあった。シャツブラウスとして適切ないせ分量になるよう作図の段階で確認すべきである。
- ・袖付けのピン打ちは、縫い目線のきわを袖付け線に沿って平行に止めるが、ピン打ちの不備のために袖のシルエットを崩してしまったものが多かった。
- ・今回の絵型は身頃の袖ぐりにステッチがないのでイセの少ない袖高のセットイン袖であるが身頃高になっている物もあり許容の範囲ではあるが、身頃に無理がかかりしわの原因になっている。

<ステッチ>

- ・パターン上のステッチはパターンの端と端に記入されていればよいが、シーチング組み立てにおいてはすべて記入されていなければならない。
- ・ステッチ幅違い、ステッチが途中までのものは不備なため、減点される。